

5) 超音波内視鏡による胃癌深達度診断 — 切除胃を対象に —

柳澤 善計・秋山 修宏
阿部 実・富樫 満 (新潟大学第三)
植木 淳一・成澤林太郎 (内科)
上村 朝輝・市田 文弘
山口 正康・岩淵 三哉 (同 第一病理)

超音波内視鏡 (以下 EUS) を用い、切除胃癌50症例53病変を対象に深達度診断を行なった。正診率は、m 癌 82.4%, sm 癌 33.3%, pm 癌 50.0%, ss 癌 73.3% であった。

誤診例20病変では、隆起性病変ないしは massive growth 病変において、その直下のエコーレベルが減弱し、深く読みすぎたもの、および、消化性潰瘍合併例において、潰瘍による層構造の断裂や fibrosis が、癌と鑑別できなかったものが大部分を占め、EUS の解像度の向上が必要と考えられた。

6) 十二指腸非定型抗酸菌症の1例

山田 慎二・打越 康郎
岡田 和彦・角谷 宏 (立川総合病院)
杉田 健一・味方 正俊 (内科)
渡辺 裕・大貫 啓三

症例は59才、女性。上腹部不快感にて当科受診。初診時、内視鏡検査にてアフタ様の十二指腸球部潰瘍がみられた。各種抗潰瘍剤、H₂ ブロッカーにも難治であった。

ガストリンは正常であり、ベーチェット、クローン病は注腸、眼所見より否定されたが、マントーテストにて強陽性であった為生検組織の抗酸菌培養を施行したところ非定型抗酸菌が検出された。2ヶ月後の再検でも結果は同様であった。非定型抗酸菌症として治療を開始したが、現時点では治癒傾向はみられていない。

十二指腸非定型抗酸菌症は報告例も殆んどなく、貴重な症例と思われた為、考察を加え報告した。

7) エコー下穿刺が診断上有用であった虫垂 原発腹膜偽粘液腫の1例

齊藤 敦・塚田 芳久 (信楽園病院内科)
村山 久夫
清水 武昭 (同 外科)

症例、44歳、男性。主訴、食思不振。既往歴、20歳虫垂切除術。現病歴、4か月前より下痢、2か月前より食思不振・易疲労感出現。現症、右側腹部に手拳大腫瘤を触知。腹部 CT・エコーにて特徴あるのう胞状腫瘤を認め、エコー下のう胞穿刺でゼラチン様粘液が吸引されたことにより腹膜偽粘液腫を疑い手術を行った。術前の注腸検査では虫垂の描出がみられた。開腹したところ、腹

腔内にゼラチン様粘液が貯留し、のう胞状腫瘤は虫垂と連続していた。病理組織学的には、Low grade な Mucinous Cystadenocarcinoma であった。術前 CEA 値は 5.6ng/ml とやや高値であったが、術後は 1.1ng/ml と低下した。腹膜偽粘液腫の診断には、CT・エコー等の画像所見に加え、エコー下穿刺の所見がきわめて重要であると思われる。

8) ステロイド動注療法後に急性膵炎を合併 した小児潰瘍性大腸炎の1例

植木 淳一・永田 邦夫
柳澤 善計・富樫 満 (新潟大学第三)
阿部 実・成澤林太郎 (内科)
上村 朝輝・市田 文弘
原 敬治 (同 放射線科)

症例は9才女児。昭和61年5月に粘血便を主訴に近医を受診、潰瘍性大腸炎 (UC) と診断され、サラゾピリン、プレドニンを内服。同年8月に当科に入院。その後、プレドニン減量に伴い再発を繰り返すため、減量が困難であった。12月3日、SMA, IMA にプレドニン各10mg を one shot 動注を施行したところ、5日早朝から急性膵炎を発症した。内科的治療により約1週間で急性膵炎は治癒し、同時に UC に伴う症状、炎症所見、低栄養状態の改善をみた。ステロイドによる急性膵炎の発症につき、文献的考察も如えて報告する。

9) 家族性大腸腺腫症患者の十二指腸乳頭部 病変の経過観察

野田 裕・渡辺 英伸 (新潟大学医学部
第一病理)
飯田 三雄 (九州大学医学部
第二内科)

今回我々は、家族性大腸腺腫症 (FAC) 患者の Vater 乳頭部腺腫の経過観察結果について検討を加え以下の知見を得た。

1) FAC に随伴する十二指腸乳頭部腺腫の発生は20例中13例と高頻度であった。2) 1年4カ月から12年3カ月にわたる観察では腺腫の形態変化、異型度の増強は認められなかった。3) 腺腫の中には部位により異型度の差を示すものがあり、乳頭表面や開口部よりも膨大部で異型度の高いものがあつた。4) FAC 患者では X 線や内視鏡観察がしがたい乳頭部、特に膨大部は生検を含めた注意深い観察をする必要があろう。